

「朝鮮学報」第183輯 別刷

平成 14 年 4 月 刊

2002년 4월

日本語と韓国語における談話ストラテジー
としてのスピーチレベルシフト

金 珍 娥

日本語と韓国語における談話ストラテジー としてのスピーチレベルシフト

金 珍 娥

【요지】 본 연구는 한국어와 일본어의 “스피치 레벨 시프트”(speech level shift)가 담화 전략으로서 가지는 기능을 고찰한 것이다. 스피치 레벨 시프트라는 것은 스피치 레벨이 “합니다/해요”체와 같은 “경의체”에서 “해”체와 같은 “비경의체”로 바뀌거나, 혹은 그 반대로 움직이는 것을 말한다. <첫대면인 두 사람>의 회화를 녹음하여 문자화하고, 정량적 분석을 위해 기호화하였다.

비경의체적 기능을 하는 “술부 없는 발화”가 일본어에서는 한국어의 2배 이상 나타나, 한국어와는 색다른 일본어의 담화 전략으로서의 기능을 하고 있었다.

본 연구에서 얻어진 가장 중요한 점은, 담화에서 대우를 유지하는 것은 용언이 가지는 대우법어미 뿐만이 아니라는 점이다. 기존의 경어 연구에서는 “desu/masu”체, “합니다/해요”체 등의 대우를 나타내는 용언어미의 스피치 레벨이 대우를 유지하는 것으로 암묵리에 생각되어 왔다. 그러나, “술부 없는 발화”, 즉 대우법어미가 없는 발화에 있어서도 본고가 “비문말대우”라고 부르는 장치를 통해 청자대우가 유지되고 있음이 본고에서 처음으로 밝혀진 것이다.

경어사용의 한일대조 연구를, 종래의 문장 단위의 정적인 연구에서, 담화의 흐름에 따라 경어의 움직임 고찰하는 동적인 연구로 발전시킴으로써, 경어사용이 담화의 전략적 용법으로서도 중요한 기능을 하고 있음을 밝힐 수 있었다.

目 次

1 はじめに

1.1 研究目的

1.2 先行研究

2 研究方法

2.1 研究の焦点

- 2.2 Brown&Levinson (1987)のpoliteness理論
- 2.3 実験計画
- 2.4 データの分析方法
- 3 分析項目
 - 3.1 日本語のスピーチレベルとそのシフトにおけるコーディング(記号化)
 - 3.2 韓国語のスピーチレベルとそのシフトにおけるコーディング(記号化)
 - 3.3 コーディングにおける発話文の扱い
- 4 結果
 - 4.1 談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト
 - 4.2 日本語と韓国語におけるスピーチレベルシフトの割合
 - 4.3 スピーチレベルシフトが行なわれる際に向かうスピーチレベルの割合
- 5 まとめ

1. はじめに

1.1 研究目的

本稿の目的は、日本語と韓国語におけるスピーチレベルシフトのありよう⁽¹⁾と、スピーチレベルシフトが持つ談話ストラテジーとしての機能を考察するところにある。単に言語形式の面を見るだけではなく、発話の流れにおけるスピーチレベルの選択が如何なる機能を果たしているのかという機能的な面についても、日本語と韓国語を対照しつつ検討する。

1.2 先行研究

スピーチレベルシフトは、「です・ます」体のような「敬体」のスピーチレベルから「だ・である」体のような「常体」のスピーチレベルへ、または、その逆の切り替えのことを指す。日本語のスピーチレベルシフトを捉えた研究は、Ikuta(1983)、生田・井出(1983)、三牧(1993, 2001)、足立(1995)、宇佐美(1995, 2001)などがある。これらの研究は、スピーチレベルシフトが相手に対する話者の心的距離や態度の変化を表す談話のストラテジーであることを明らかにしている。

一方、韓国語におけるスピーチレベルの研究を見ると、Martin(1964)、서정수(1972)、고영근(1974)、梅田(1977)、남기십 고영근(1985)、노마[野間](1996a)など、文レベルからの伝統的な文法研究は多いが、スピー

日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト(金) (53)

チレベルのシフトを自然会話の中で捉えた研究はほとんどなされていない。

その中で、이정복(1996)は、スピーチレベルを談話ストラテジーとして説明している。しかしながら、軍隊という、韓国内でも特殊な社会での電話のやりとりをデータとして用いている点と、軍隊内の談話であるため、命令法や勧誘法の意図的ストラテジーの考察に限られている点が惜しまれる。

スピーチレベルシフトは文レベルでは捉えることができず、本稿のごとく、談話レベルの考察を行なうことによって初めて捉えることが可能になる。韓国語における諸研究は、未だ文レベルを脱しきっていないと言えよう。

2. 研究方法

2.1 研究の焦点

本研究では、日韓両言語における初対面、二者間の自然会話をデータとする。①スピーチレベルシフトのダイナミックな談話効果、②両言語におけるスピーチレベルシフトの割合の比較、③スピーチレベルがシフトする際の移行先に現れるスピーチレベルのありよう、この三点に焦点を当て、スピーチレベルシフトの日韓対照を行う。このような観点から両言語の対照研究を行うことにより、日本語においては、先行研究を検証すると共に、日本語からだけでは見えないスピーチレベルの現われ方や特質を明らかにすることができると思う。

韓国語においては、静的研究として扱われてきた敬語研究を、話者間の外的条件を考慮に入れた、実際の相互作用における動的な談話ストラテジーとして捉えることが、可能になると思われる。

スピーチレベルシフトのありようをみるには、次の三つの方法が考えられる：

1. ある特定の話者がどうシフトさせているのかに着目し、時間軸に沿ってダイナミズムをみる方法

2. 双方の話者がどのようにスピーチレベルを用いたかに着目し、そのダイナミズムを探る方法
3. 1と2を合わせてみる方法

本稿では、ある特定の話者のシフトを見るのではなく、相手とのやりとりにおける変化のありようを中心にしてみるため、第2の方法を選択する。つまり、話し手の発話であれ、聞き手の発話であれ、直前の発話に対して話し手が如何にシフトを行っているかを見るわけである。

2.2 Brown&Levinson (1987)のpoliteness理論

言語行動におけるpolitenessを取り扱っているB&L(1987)は、発話行為には、命令したり不満を言ったりすることでfaceを脅かす行為(Face Threatening Acts: 以下FTAと記す)があるとす。このFTAの度合いが高くなればなるほど、よりポライトなストラテジーが必要になると捉えている。同じ立場であることや理解を示し、冗談などで親しみを表すストラテジーとして**positive politeness**、相手に負担をかけることを避け、敬意を表わしたり、相手のfaceを尊重するストラテジーとして**negative politeness**という概念を挙げている。

本研究では、日本語と韓国語におけるスピーチレベルのシフトを、B&L(1987)が定義しているポライトネス・ストラテジーの観点からも考察を試みる。

2.3 実験計画

本研究の実験の枠組みは、宇佐美(1995)に従った。日・韓ともに、被験者は、ベースとなる被験者に対し、同性と異性、それぞれ目上、目下、同等の人物を対話者として設定する。被験者の年齢は、ベースの被験者の年齢を20代半ばに定め、目上と目下の被験者はベースの年齢から5歳以上の差を置くことにする。会話は実験者不在で各15分ずつ行い、話題の変化は自然に任せることを、被験者に指示した。(4) 会話は、最初の5分間を文字化した。(5)

2.4 データの分析方法

まず、会話録音から得られたデータを、宇佐美(1997)の「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)」に基づいて文字化する。文字化した発話を、宇佐美(1998,1999,2001)を参考に数量化し、定量的分析ができるように、コーディング(記号化)を行なう。コーディングは一つの発話文を単位として行う。⁽⁶⁾ 会話のコーディングの信頼性を確認するために、筆者とは別に第二認定者(second coder)を立て、その判断の一致度をCohen's kappa⁽⁷⁾ (Bakeman & Gottman 1986)を用いて確認する。

3. 分析項目

スピーチレベルを記述するに際しては、発話の言語形式に現れた諸要素と、発話の機能の双方を勘案する。まず、言語形式は文末の述部の形式と、それ以外の部分の諸形式の二つに分けて考察する。前者による待遇を文末待遇、後者による待遇を非文末待遇と呼ぶことにする。また、文末及び非文末という発話の言語形式のみならず、実際的な表現効果までもも総合した、発話全体の機能も見る。これを機能待遇と呼ぶことにする。

本研究では、文末待遇、非文末待遇、機能待遇というこうした三つの項目から、聞き手に対する一発話文のスピーチレベルを同定する。表1に一発話文における文末待遇、非文末待遇、機能待遇を担う部位を示す：

表1 非述部・述部と文末待遇、非文末待遇、機能待遇との関係

非述部 [尊敬語・謙讓語を持ち得る]	述部	
	用言 [尊敬語・謙讓語を持ち得る]	待遇法語尾
非文末待遇		文末待遇
機能待遇		

およそ待遇法は言語形式の上では述部にのみ現れる要素である。述部に

現れる待遇法を本研究では文末待遇と呼ぶ。しかし、スピーチレベルはこうした待遇法の諸形式によってのみ維持されるわけではない。実は、スピーチレベルの維持には文末の待遇法以外の要素が深く関わっている。既存のスピーチレベルの研究にあっては、後述のように実際の談話に数多く出現する「述部のない発話」に対する位置付けが全くなされていなかった。日本語の会話においては発話の半分ほどを述部のない発話が占めている。「述部のない発話」が半分近く現れているにもかかわらず、我々は談話においてはスピーチレベルの存在を常に意識している。つまり言語形式の上では待遇法語尾が存在しないにもかかわらず、聞き手に対する待遇、即ちスピーチレベルは常に機能しているのである。音声に現れた丁寧/非丁寧という性格から敬体/常体相当の発話として判断しうる例も多々存在するが、述部のない発話、即ち、待遇法語尾がない発話のスピーチレベルを決定付ける要素は、他ならぬ述部以外の要素に求めることができる。述部のない発話は、述部以外の要素、即ち本研究で呼ぶ非文末待遇というデバイスにより、そのスピーチレベルの機能が支えられるのである。

3.1 日本語のスピーチレベルとそのシフトにおけるコーディング（記号化）

3.1.1 日本語のスピーチレベルの分類法

3.1.1.1 日本語の発話の言語形式による分類

一発話文に幾つかのスピーチレベルの要素が混在している場合は、最も丁寧度が高いレベルにコーディングする。

3.1.1.1.1 文末待遇⁽⁸⁾

発話の文末の述部の形式に現れた待遇法を見る：

- ・ P — polite form : 述部が敬体である発話文
- ・ N — non-polite form : 述部が常体である発話文
- ・ Z⁽⁹⁾ — no-marker : 上記に属するマーカーが表れていない発話文、述部のない(zeroの)発話文

本研究のコーディングにおいて最も重要であるP(敬体)・N(常体)とZ(述部のない発話)の区別は、述部の有無に置く。「します/する」のような、敬体と常体の対立を持つ述部が出現した場合は、敬体か常体のうち当該の項目でコーディングする。発話文の構造上で述部を持たない発話文は、文末待遇においては全て敬体と常体の対立を持たない発話文ということになる。敬体と常体の対立を持たない要素しか現れない発話文は、全てZにコーディングする。本稿では「敬体/常体」という対立の存在に注目し、発話文をどこまでも対立項からなる範疇として捉える。

⁽¹⁰⁾
3.1.1.1.2 非文末待遇

一発話文の文末の待遇法以外に現れる言語形式の丁寧度の使い分けを見る：

- ・S — super-polite form : 聞き手に対する尊敬語、謙讓語が文中に含まれている発話文
- ⁽¹¹⁾- ・S3 — super-polite form : 第三者に対する尊敬語、謙讓語が文中に含まれている発話文
- ・P — polite form : 敬体が含まれている発話文
- ・N — non-polite form : 上記以外の発話文

本研究ではSとS3を設定することにより、尊敬語、謙讓語の使用が聞き手に対するものか、第三者に対するものか区別する。こうすることによって、第三者に対する尊敬語、謙讓語が聞き手に対する待遇へ与える影響についても考察が可能となる。また、非文末待遇は複文や単文において文末待遇がない述部のない発話の場合、次に述べる機能待遇で待遇を決定する。複文の場合は尊敬語、謙讓語Sや敬体P、単文の場合は尊敬語、謙讓語Sにより、機能待遇を決めうる。非文末待遇における敬体には、従属節における「です/ます」体や間投詞の「はい、ええ」などが該当する。

韓国語における文末待遇のPf, Pi, Pcは、スピーチレベル上では、おおむね日本語のPに該当するものである。しかし、Pfは格式性を持つ点で、格式性のないPとは異なり、Pi, Pcは目上の人には使いにくいなど、その機能がPとは明らかに異なるため、それぞれPと区別し、コーディングを行った。

3.2.1.1.2 非文末待遇

一発話文の文末の待遇法以外に現れる言語形式の丁寧度の使い分けを見る：

- ・ S — super-polite form : 尊敬の接尾辞⁽¹⁶⁾ |si| がついた用言など、聞き手に対する尊敬語、もしくは謙讓語が文中に含まれている発話文
- ・ S3 — super-polite form : 尊敬の接尾辞 |si| がついた用言など、第三者に対する尊敬語、もしくは謙讓語が文中に含まれている発話文
- ・ P — polite form : 敬意体が含まれている発話文
- ・ N — non-polite form : 上記以外の発話文

3.2.1.2 韓国語の発話の機能による分類

3.2.1.2.1 機能待遇

文末及び非文末という発話の言語形式のみならず、実際的な表現効果までも総合した発話全体の機能としての待遇を見る。日本語と同様、機能的にポライトな発話文と、カジュアルな発話文の二つの項目に分ける：

- ・ P — polite
- ・ N — non-polite, casual

機能待遇が、述部のない(zero)の発話Zなどのスピーチレベル判定に用いられる点など、3.1.1.2.1の日本語の場合と同様である。以下にその判断基準例を示す：

表3 韓国語における文末待遇・非文末待遇と機能待遇の関係

		非文末待遇			
		S(尊敬語/謙讓語)	P(敬体)	N(常体)	Z(述部なし)
文末待遇	P(敬体)	진지는 드셨어요? 機能待遇 / P	밥은 먹었습니다만. 그 다음엔 될 할까요? 機能待遇 / P	밥은 먹었지만. 다음엔 될 할까요? 機能待遇 / P	밥은 먹었어요? 機能待遇 / P
	N(常体)	진지는 드셨어? 機能待遇 / N	밥은 먹었습니다만. 다음엔 될 할까? 機能待遇 / N	밥은 먹었지만. 다음엔 될 할까? 機能待遇 / N	밥은 먹었어? 機能待遇 / N
	Z(述部なし)	진지는? 機能待遇 / P	밥은 먹었습니다만. 그 다음엔? 機能待遇 / P	밥은 먹었지만. 다음엔? 機能待遇 / N	밥은? 機能待遇 / N

3.2.2 韓国語のスピーチレベルシフトの分類法

3.2.2.1 スピーチレベルシフト (4.1.1の例3参照)

文末待遇に着目し, その前後のシフト関係を見る。文末待遇が「Z」でコーディングされた場合は機能待遇によりシフトを判断する。ただし, 文末待遇のPf, Pi, PcはPとして扱い, 前後のシフトを判定する。

・PN	— polite no shift	: 敬体Pの発話からシフトが行われていない場合
・D	— down shift	: 直前の発話よりスピーチレベルが下がった場合
・U	— up shift	: 直前の発話よりスピーチレベルが上がった場合
・NN	— non-polite no shift	: 常体Nの発話からシフトが行われていない場合

3.3 コーディングにおける発話文の扱い

3.3.1 単文

述部, 非述部を問わず, 尊敬語・謙讓語の使用は非文末待遇で扱う。また, 述部における敬体と常体の使用, 述部の有無は文末待遇で扱う。上記の表1と表2の例がそれである。

3.3.2 複文

従属節における尊敬語, 謙讓語の使用と, 述語部分のスピーチレベルは非文末待遇で扱い, 主節の述部における敬体と常体, 述部の有無は文末待

遇で扱う：

【例1】 今日はいらっしゃって、明日は来ないの？

非文末待遇：S 文末待遇：N 機能待遇：N

3.3.3 中途終了発話文

本稿では、中途終了発話文に次のタイプを認める：

表4 中途終了発話文の類型

1) 非意志的中途終了発話文	相手によって終了させられる発話文	同時発話による中途終了 話者と同時に相手がかぶせる発話文
		割り込み発話による中途終了 話者の発話に相手が割り込む発話文
2) 意志的中途終了発話文	話者が終了する発話文	言いよどみによる中途終了
		自分の意志で中止する中途終了 述部のない発話、従属文の述部で終了している発話文

3.3.3.2 意志的中途終了発話文

意志的中途終了発話文には、①言いよどみによる中途終了発話と、②話者の意志による発話中止の中途終了発話の二種が存在する。二つの中途終了発話のうちのいずれかに明確に決定できる場合は、①はZに記号化し、②は述部があればNに、述部がなければZに記号化し得る。しかし、実際の会話を記号化する際、二つの中途終了発話をNかZのいずれかに決定するのは研究者の主観に流れやすい。また、この二種の中途終了発話には、「そう思って」と「そう思いました」や「こうした方がいいので」と「こうした方がいいのです」のように、スピーチレベルの対立が存在する。

そこで本研究では、各発話文のスピーチレベルのシフトを見るため、言いよどみの中途終了発話文と、話者の意志による発話中止の中途終了発話文の区別はしない。述部が表れている中途終了発話文は、敬体Pか常体N

に、述部が現れていない中途終了発話文はZに記号化する。

3.3.4 相づち発話文

相づちをメイナード(1993)は、「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現(非言語行動を含む)で、短い表現のうち話し手が順番を譲ったとみなされる反応を示したものは、あいづちとしない。」と定義している。この定義を踏まえた上で、本稿は相づち発話文を表5のような類型に分類する：

表5 相づち発話文の類型

	(1)文法的な対立項を持つ相づち	(2)語彙的な対立項を持つ相づち	(3)対立項を持たぬ相づち
	述部のある相づち	述部のない相づち	
敬体P	そうですね、そうですか	はい、やはり	え、ええ、
常体N	そうだね、そうか	うん、やっぱり	へ、あ、んん、ねえ

相づち発話文は、(1)文法的な対立項を持つ相づち、(2)語彙的な対立項を持つ相づち、(3)対立項を持たぬ相づちの三つの類型に分け得る。述部を持つ相づちは文法的対立項を有するが、述部のないものは文法的対立を有さない。一般に全ての語彙は文体的属性を持つが、そのうち語彙的な対立項があるもの(2)とないもの(3)に分類しうるのである。述部を持たない(2)と(3)に属する相づちは、文末待遇では、述部のない発話Zに記号化し、機能待遇では、「敬体的機能、常体的機能を持つ発話」という意味で敬体Pか常体Nに区別する。

4. 結 果

日韓両言語におけるスピーチレベルシフトの結果を、上記の2.1で挙げた三つの焦点から考察する。

4.1 談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト

スピーチレベルがどのようにシフトされ、どのような談話効果を生むストラテジーとして現われているのか、日本語と韓国語の会話から例を抜粋し、両言語におけるスピーチレベルシフトの特徴を示す。

4.1.1 年齢の差がある目上話者との会話

まず、日本語における目上話者との会話例を提示する：

【例2】日本語 女性ベースと目上女性の会話

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
80	*	日女上	あ、そうなんですか。	N	P	P	PN
81	*	日ベース	はい。	P	Z	P	PN
82	*	日女上	なんか、うん、しゃべっていてもユニークな人だと。〈笑い〉	N	N	N	D
83	*	日ベース	うん、そうですよね。	N	P	P	U
84	*	日女上	うん、と思って、それで、もう、なんか、こう印象に残る方でした。	S3	P	P	PN
85	*	日ベース	はい、印象には残る方ですよ、きっと。〈笑い〉	S3	P	P	PN
86	*	日ベース	あー、その名前を聞くとは思わなかった。〈笑う〉	N	N	N	D
87	*	日女上	こんな所くまで来て。〉 ⁽¹⁸⁾	N	N	N	NN
88	*	日ベース	<こんな所で> はい。	P	Z	P	U
89	*	日女上	そうか。	N	N	N	D
90	*	日ベース	あ、そうですか。	N	P	P	U
91	*	日ベース	あ、じゃあ、ご専門は文学くなんですか?>	S	P	P	PN
92	*	日女上	<あ、文学> なんです。	N	P	P	PN

例2は、日本語における女性ベースと目上女性の会話である。互いに偶然知り合いだった人物が話題になっている。目上女性は、目下ベースに対し、発話No.82, 89でDownシフトを行なっている。目上女性の発話No.82

日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト(金) (65)

は、ベースの「その人とは2年3年も多分一言も話してない」という前の発話内容に対し、常体へDownシフトしながら、ベースの「一言も話していない」ことに関する理解を表している。発話No.89のDownシフトも、相づちの発話文で、理解を表している。一方、目上話者に対し目下ベースは、発話No.86でDownシフトしている。発話No.86は、意外なできごとに関する驚きを独り言のようにDownシフトすることにより、心的距離を縮め、笑いも伴っている。ここでは、Downシフトが positive politeness ストラテジーとして機能していると言える。また、目上話者の発話No.80, 84, 92では、目下ベースの敬体に対し、敬体で対応するPNシフトを見せている。目上話者は目下話者に対し丁寧さを守ろうとしているわけである。目下ベースの発話No.83, 88, 90では、目上話者に対し、Upシフトしている。目上の相手に対する適当な距離感や丁寧さを表している。UpシフトとPNシフト(敬体PでのNOシフト)は、negative politeness ストラテジーとして用いられていると言える。日本語の年齢の差がある会話は、全般的に敬体が維持されるという特徴がある。

次に、韓国語における目上話者との会話例を挙げる:

【例3】 韓国語 女性ベースと目上女性の会話

発話文No.	発話終了	話者	発話内容	非文末待遇	文末待遇	機能待遇	シフト
22	*	韓ベース	식당에 안 가세요? (食堂に行かないんですか?)	S	P	P	U
23	*	韓女上	오래 되면 식당에 안 가게 돼요. (長くなると食堂に行かなくなります。)	N	P	P	PN
24	*	韓女上	도시락으로 해결을 하지. <웃음> (お弁当で解決するの。<笑い>)	N	N	N	D
25	*	韓ベース	아 그렇구나! (あ、そうか!)	N	N	N	NN
26	*	韓ベース	하긴 식당밥도 몇 년 먹으면 질리죠. (まあ、食堂のご飯も何年も食べればあきますからね。)	N	P	P	U

發話 文No.	發話 終了	話者	發話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
27	*	韓女上	맞아. (そうね。)	N	N	N	D
28	*	韓ベース	나이 그렇게 많아 보이지 않는데, 스몰 일곱?(そんなに年取っている ようには見えないけど, 27?)	N	Z	P	U
29	*	韓女上	근데 나 70년생이 해야 된다고 그래 가지고 하는 거예요. (で, 私, 70年生まれじゃなければ いけないと言われてやっているんで すよ。)	N	P	P	PN
30	*	韓女上	아니면 "나 왜 해야 돼" 그랬더니 서른 살이 필요하대. <웃음> (じゃなければ"なんで私がやらな ければいけないの?"って聞いたら, 30 歳が必要なんだって。<笑い>)	N	N	N	D
31	*	韓女上	서른 살 떡 줄 줄 아나 쟁피해 죽겠어. <웃음> (30歳, 餅でももらえと思うてい るのか恥ずかしいのよ。<笑い>)	N	N	N	NN
32	*	韓ベース	그렇게 안 보이는데. (そんなに見えないけど..)	N	N	N	NN
33	*	韓女上	고마워요. 뭐 먹고 싶어요? (ありがとうございます, 何か食べ たいですか?)	P	P	P	U
34	*	韓ベース	아 근데 학교에 있으면 젊어지는 것 같지 않으세요? (でも, 学校にいと若くなるよう に思いませんか?)	S	P	P	PN
35	*	韓女上	응 맞아. 나이를 안 먹는 것 같아. (うん そう, 年を取らないような の。)	N	N	N	D

例3は、女性ベースと目上女性の韓国語の会話の一部分で、学食の話題から年齢の話題へ移っていく場面である。ここで、日本語との明らかな違

いは、Downシフトはほとんど目上女性が行っており、Upシフトはほとんど目下であるベースが行っていることである。発話No.24, 27, 30, 31, 35のように、目上女性は、目下であるベースに対し、Downシフトと常体でのNOシフトを用いている。発話No.24「도시락으로 해결을 하지.(お弁当で解決するの。)」や発話No.31「서른 살 떡 줄 줄 아나 챙피해 죽겠어.(30歳, 餅でももらえらと思ってるのか, 恥ずかしいのよ。)」のように親しみを感じやすく、笑いを伴う冗談のような**positive politeness**ストラテジーとしての発話である。それに対して、目下ベースは、目上女性に対し、発話No.22, 26, 28, 34で、Upシフトと敬体でのNOシフトを見せている。質問の場合と自分の発話からのUpシフトであり、目上の相手に対して改まった感じや丁寧さを維持しようとする**negative politeness**ストラテジーとして用いられている。ここで、興味深いところは、発話No.33の目上女性の目下ベースに対するUpシフトである。

直前の発話までは常体で発話を続けていた目上女性は、「고마워요, 뭐 먹고 싶어요? (ありがとうございます, 何か食べたいですか?)」とUpシフトしている。このUpシフトは、敬体の改まり度を嬉しさの強調に利用し、冗談のような雰囲気を作る**positive politeness**ストラテジーとしての機能を果たしている。面白いことに、初対面の会話で、冗談に現れるUpシフトは日本語のデータには見られない。

以上、年齢差がある日本語と韓国語の会話例の結果を要約すると次の表のごとくである：

表6 年齢差がある日本語と韓国語の会話の傾向

	Upシフト, 敬体PでのNOシフト			Downシフト, 常体NでのNOシフト		
	ストラテジー	主要因	使用頻度	ストラテジー	主要因	使用頻度
日本語	negative politeness	初対面	互いに使用頻度が高い	positive politeness	初対面	互いに避ける
韓国語	negative/positive politeness	年齢	目下の使用頻度が高い	positive politeness	年齢	目上の使用頻度が高い

4.1.2 年齢の差がない同等話者との会話

年齢の差がない同等関係の会話では日韓にどのような違いがあるのだろうか。日本語の例から見てみよう：

【例4】日本語 女性ベースと同等女性の会話

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
64	*	日ベース	え、いくつぐらい授業持ってるんですか?	N	P	P	U
65	*	日女同	全部で14コマ持ってる。	N	N	N	D
66	*	日女同	でも、ネイティブの先生と組んでやってたからそんなに大変というほど大変じゃなくてけっこうそっちで時間が取られているっていう感じ。	N	Z	N	NN
67	*	日ベース	で、こう、ゼミって言うか。	N	N	N	NN
68	*	日女同	ゼミだけ。	N	Z	N	NN
69	*	日ベース	だけ?	N	Z	N	NN
70	*	日女同	あ、もう、単位は去年ほとんど取っちゃったからもう、後残ってるのはその論文だけで後はもう。	N	Z	N	NN
71	*	日女同	一応、今のゼミだけは出てこうかなとか思って、それで来てるっていうだけで。	N	Z	N	NN
72	*	日ベース	で、留学ってじゃ、秋からですか?	N	P	P	U
73	*	日女同	秋からあのカナダのほうに。	N	Z	N	D
74	*	日ベース	へー、いいですね。〈笑い〉	N	P	P	U
75	*	日ベース	ケベック?	N	Z	N	D
76	*	日女同	ケベック。	N	Z	N	NN
77	*	日ベース	あ、やっぱり。	N	Z	N	NN

例4は、日本語における同等女性間の会話の一部である。二人とも大学院生で、学校に来る日のことを話題にしている。まず、Upシフトが現れている発話は、ベースの発話No.64, 72, 74のみである。

それら以外は、全ての発話がDownシフトと、それに続く常体でのNOシ

フトである。これは、二人は心的距離が近く、親しみやすかったものと解釈できる。初対面という社会的条件よりも、年齢が同等の関係であることが大きな影響を与えているのではないだろうか。

ここで注目したいのは、Downシフトと、それに続く常体でのNOシフトの発話文の中で、発話No.66, 68, 69, 70, 71, 73, 75, 76, 77の発話文が述部を伴わない発話文であることである。また、述部のない発話文が連続して会話を成り立たせている。これは何を意味しているのだろうか。お互いに心的距離を縮めるために敬体は避けたいが、完全に常体を使うと初対面の相手に失礼になる恐れがある。そこで、述部を省略した発話文を使うことにより、失礼になる度合いを下げ、距離感を縮めようとしているものと考えたい。述部のないこうした発話文については以下の4.3で再び取り上げることにする。

次は、韓国語における年齢の差がない同等関係の会話の一部を提示する：

【例5】 韓国語 女性ベースと同等女性の会話

発話文No.	発話終了	話者	発話内容	非文末待遇	文末待遇	機能待遇	シフト
49	*	韓女同	마땅하게 실험할 것두 없으니까 학생들한테 유용하게 그렇게 하는 건 좋은 것 같아요. (あまり実験することもないから、学生が使えるようにそうするのはいいと思いますよ。)	N	P	P	PN
50	*	韓ベース	그럼 학교에서 11월까지 계신 다음에는? (学校で11月までいらっしゃった後は?)	S	Z	P	PN
51	*	韓女同	취업해야죠, 이제. (就職しなければいけないですね, もう。)	N	P	P	PN
52	*	韓ベース	학교에서 보게 되면요. (学校で会いましたら。)	N	P	P	PN
53	*	韓女同	예. (ええ。)	P	Z	P	PN

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
54	*	韓ベース	학부애들 졸업하고 나면 애들 없잖 아요. (学部生たち卒業したら友達 いないんじゃないですか。)	N	P	P	PN
55	*	韓女同	그렇죠. (そうですね。)	N	P	P	PN
56	*	韓ベース	많이 아이들 알아 놓는 게 좋을텐데. (たくさん知り合いになる方がいいの に。)	N	N	N	D
57	*	韓女同	4초침묵/ 근데 아직 우리 이름도 얘기 안 했어요. <웃음> (4秒沈 黙/で、まだ、私たち名前も言っ てなかったですね。)	N	P	P	U
58	*	韓女同	저는 (이름)라고 해요. (私は(名前)といます。)	S	P	P	PN

例5の、韓国語における同等関係の会話は、日本語における同等関係の会話とは対照的な傾向を示している。日本語では、Downシフトとそれに続く常体でのNOシフトが主流をなしている反面、韓国語ではUpシフトとそれに続く敬体でのNOシフトが主流をなしている。その中でベースの発話No.56は、Downシフトしながら、「많이 아이들 알아 놓는 게 좋을텐데. (たくさん知り合いになった方がいいのに。)」と、知り合いになりたいということを表明している。親密感を相手に伝え、心的距離を縮めようとしている。しかし、その次の発話No.57で「근데 아직 우리 이름도 얘기 안 했어요. (まだ、私たち名前も言ってなかったですね。)」と名前を話題にする話題転換により、この会話での基本レベルであると思われる、敬体の使用へ戻すUpシフトが行われている。このような様相から、韓国語における同等関係の会話は、年齢が同等である事実より、初対面という社会的条件に基づいて、適当な丁寧さや距離感を保とうとしている傾向にあると言える。

以上、年齢差のない日本語と韓国語の会話例の結果を要約すると次の表のごとくである：

日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト(金) (71)

表7 年齢差のない日本語と韓国語の会話の傾向

	Upシフト, 敬体PでのNOシフト			Downシフト, 常体NでのNOシフト		
	ストラテジー	主要因	使用頻度	ストラテジー	主要因	使用頻度
日本語	negative politeness	年齢	互いに使用頻度が低い	positive politeness	年齢	互いに使用頻度が高い 述部のない発話の多用
韓国語	negative politeness	初対面	互いに使用頻度が高い	positive politeness	初対面	互いに避ける

4.1.3 韓国語独特のスピーチレベルシフト

日本語と韓国語のスピーチレベルの体系が異なっているため、日本語には現われないスピーチレベルシフトが韓国語に現われている。韓国語のスピーチレベルが敬体と非敬体(常体)の大きく二つに分けうることは、日本語のスピーチレベルと同様であるが、日本語の敬体が「です・ます体」の一種であるのに対し、韓国語の敬体には「hpnita体」と「hayyo体」の二種が存在している。また、日本語の常体も「だ・である体」の一種であるのに対し、韓国語の非敬体(常体)は「hanta体」と「hay体」の二種類に分けうる点で異なる。

表8 日本語と韓国語におけるスピーチレベルの対照⁽¹⁹⁾

日本語		韓国語		
敬体	です・ます体	hpnita体	格式	敬意体
		hayyo体	非格式	
常体	だ・である体	hanta体・hay体		非敬意体

このうち、hpnita体がより格式を持つため、hayyo体より、上のレベルへ位置付ける。このようなスピーチレベルの違いによって、韓国語においては、日本語では見られない、より繊細なスピーチレベルシフトを実現しうるのである。

【例6】 韓国語 女性ベースと目上女性の会話

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
77		韓ベース	근데 교직원이면 돈 좀 모아 가지구 방학 때. (それなら, 職員ならお金 をちょっと集めて, 休みの時)				
78	*	韓女上	월급 적어요. <웃음> (給料少ないですよ.<笑い>)	N	P	P	PN
79	*	韓女上	많지 않습니다. <웃음> (多くありません.<笑い>)	N	Pf	P	PN

例6は、韓国語における女性ベースと目上女性との会話の一部である。海外旅行の話題の中で、お金がなくて行けないということを、目上女性が述べている。韓国語敬体のうち格式性を有するhapnita体を用いた発話No.79は、内容的には給料が少ないという深いプライベートの領域の、心的には負の部分を、hayyo体からhapnita体へと文体を変え、スピーチレベルをUpシフトしている。hapnita体の格式がもたらす大げさな表現が、断定的に言いつつも、皮肉や冗談のように笑いを伴う発話になっているのである。

【例7】 韓国語 女性ベースと目下男性の会話

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
68	*	韓男下	파란만장하지요. (波瀾万丈でしょう。)	N	P	P	U
69	*	韓ベース	어떻게 그런 경우가. (どうしてそういう場合が。)	N	Z	N	D
70	*	韓男下	자서전을 쓸까 합니다, 인제. <웃음> (自叙伝を書こうかと思って るんです, これから.<笑い>)	N	Pf	P	U

例7は、韓国語における女性ベースと目下男性間の会話である。目下男

性が自分の豊富なアルバイトの経験を話題にしているが、実際のところ、その内容は全くつまらないものでかつ豊富でもないことを、会話の雰囲気を楽しくさせるために、大げさに語っている部分である。そこで女性ベースが発話No.69で「어떻게 그런 경우가. (どうしてそういう場合が。)」とあきれた感じで独話のようにつぶやくと、目下男性は発話No.70で「자서전을 쓸까 합니다. (自叙伝を書こうかと思ってるんです。)」と格式性の高いhapnita体でより大げさに語っている。hapnita 体の持つ格式性が、大げさの確たる発話であることを引き立たせ、笑いを伴う効果を生んでいるのである。

格式性を逆利用して強調の意味を持たせながら、皮肉や冗談に用いる上記のようなこうした用法は注目すべきである。このことによって、hapnita 体の格式性にのみ注目していた既存の敬語研究を、発話におけるスピーチレベルの繊細な用法まで照らし出す、高次の段階へと引き上げることが可能になろう。こうした用法は会話の中において現われる数は少ないものの、会話の円滑な進行に大きな役割を果たすpositive politenessストラテジーであることがわかる。

4.2 日本語と韓国語におけるスピーチレベルシフトの割合 ⁽²⁰⁾

日韓両言語におけるスピーチレベルシフトの割合をまず図で示し、以下、シフトごとに特徴を見てみたい。

《日本語》

図1-a 女性ベースの、相手に対するスピーチレベルシフト

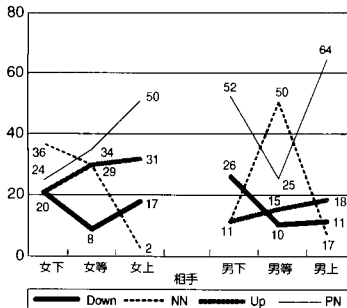
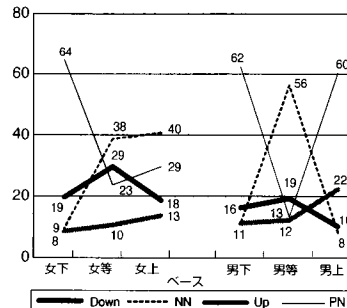


図1-b 相手の、女性ベースに対するスピーチレベルシフト



4.2.4 NNシフトー常体Nの発話からシフトが行われていないNOシフトの場合

四つのシフトの中で日韓両言語の違いがもっとも著しく表れている。

4.2.4.1 日本語におけるNNシフト

NNシフトの割合は、ベースと相手が互いに、低い相手には低く(ベース 11%:日男下/8%, ベース 9%:日女上2%), 高い相手には高い(ベース56%:日男同50%, ベース36%:日女下40%)。年齢や性別差による影響があるとは言えない。相手のスピーチレベルに合わせ、心的距離を調節しようとする傾向として解釈できる。

4.2.4.2 韓国語におけるNNシフト

日本語とはかなり対照的な傾向を示している。年齢や性別差の区分よりも全般的に20%以下という非常に低いNNシフトの頻度を見せている。年齢差より初対面である社会的条件が最も大きな影響を与えている。常体で続く発話を避けることにより、初対面の相手に失礼にならないように接していると考えられる。

韓国語のPNシフト(敬体PでのNOシフト)の割合と、UpシフトとDownシフトを合わせた頻度は、日本語より韓国語が高い。NNシフト(常体NでのNOシフト)の割合は、日本語が韓国語より高い。

この結果は、日本語では、韓国語よりスピーチレベルシフトが頻繁に行なわれていないことを意味する。相手のスピーチレベルに合わせ、心的距離を調節しようとする傾向にあることが言える。韓国語は、年齢差により目上話者がDownシフトを行うと、目下話者はすぐにUpシフトを行う傾向と、初対面の相手に常体で会話を続けることを回避している傾向がある。

4.3 スピーチレベルシフトが行われる際に向かうスピーチレベルの割合

各話者が相手に対しスピーチレベルのシフトを行った際に、どのスピーチレベルへ移行されるのか、移行後のスピーチレベルに着目し、四つの種

日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト(金) (77)

類のシフト別に、移行されたスピーチレベルの頻度を考察する。

表9 日本語のスピーチレベルシフトにおける移行先のスピーチレベルの割合
(単位：%)

スピーチレベルシフト	移行先のスピーチレベル		
	P(敬体)	Z(述部zero)	N(常体)
U (常体→敬体)	94	6	0
PN (敬体→敬体)	92	8	0
D (敬体→常体)	0	56	44
NN (常体→常体)	0	42	58

表10 韓国語のスピーチレベルシフトにおける移行先のスピーチレベルの割合
(単位：%)

スピーチレベルシフト	移行先のスピーチレベル		
	P(敬体)	Z(述部zero)	N(常体)
U (常体→敬体)	95	5	0
PN (敬体→敬体)	96	4	0
D (敬体→常体)	0	24	76
NN (常体→常体)	0	20	80

表8は、日本語と韓国語においてスピーチレベルシフトが行われる際に、移行先となったスピーチレベルの割合の平均である。敬体P、常体N、述部のない発話Zの三つのスピーチレベルからシフトの考察を行った本研究の上記の結果から注目したいのは、四つのシフトに共通的に表れているスピーチレベルが、述部のない発話Zであるということである。また、述部のない発話Zの使用頻度の違いによって、敬体や常体の使用頻度も異なって現れる。日韓両言語におけるスピーチレベルシフトの違いは、まさにZで記号化されている、述部のない発話の使用頻度の違いがもたらすものであると言える。

4.3.1 述部のない発話

こうした結果をさらに確認するために、ここでは両言語において談話構成要素として欠かせない役割を果たしていると思われる、述部のない発話Zに着目し、談話の例からその機能を考えてみる。

4.3.1.1 UpシフトとPNシフトに現われる敬体的機能の「述部のない発話」

両言語のUpシフトとPNシフトにおいては、現われた移行先のスピーチレベルの割合に大きな差はなく、敬体Pと述部のない発話Zが同程度の割合を示している。敬体Pで表れた割合は、両言語共に90%を超えている。述部のない発話Zで現われる割合は、日本語が若干高く現れているものの、両言語共に10%を下回る非常に低い割合を示している。日韓共に敬体PへのUpシフトとPNシフト(敬体Pでシフトが行われていないNOシフト)の際に、述部のない発話Zの使用が非常に低く現われている。それは、敬体みの使用により、改まり度を高くし、明確な丁寧さを表そうとする談話の効果を生み出すためであると考えられる。

ここで述部のない発話Zが、UpシフトとPNシフトの際にどのような発話で敬体的機能を果たしているのか提示する：

【例8】 日本語 女性ベースと同等女性の会話

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
4	*	日ベース	はじめまして。	P	P	P	PN
5	*	日女同	お名前は。	S	Z	P	PN
6	*	日ベース	えーと、(名前)といいます。	N	P	P	PN

【例9】 韓国語 女性ベースと同等女性の会話

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
50	*	韓ベース	그럼 학교에서 11월까지 계신 다음에는. (じゃ、学校で11月までいらっしやった後は?)	S	Z	P	PN
51	*	韓女同	취업해야죠, 이제. <웃음> (就職しなければいけないですね、もう。<笑い>)	N	P	P	PN

UpシフトとPNシフトに現われている述部のない発話は、その割合は低いけれども、両言語において同様の機能を果たしている。例8, 9で見られるように、述部を明示しないことで話者の意見を最後まではっきりと表明しない。従って、相手に話者の押し付けがましさや相手のプライベートな領域へ入り込むしつこさは感じられない。敬体の使用よりも、むしろ相手により気を配る配慮と共に、心的距離を縮める機能を果たしている。

敬体へのUpシフトとPNシフトよりも、このような述部のない発話へのUpシフトとPNシフトに、negative politenessストラテジーとしての機能がより強く現れているとも言えるであろう。

4.3.1.2 DownシフトとNNシフトに現われる常体的機能の「述部のない発話」

DownシフトとNNシフトに向かう際に現われるスピーチレベルの割合に、両言語の違いが見られた。

《日本語》

図3 Downシフトに向かう際のスピーチレベル

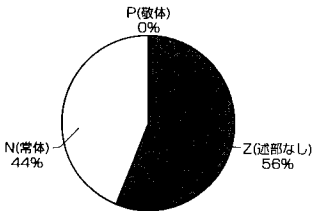
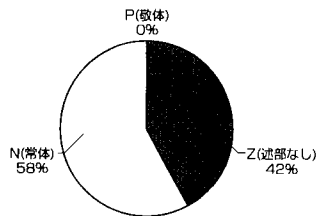


図4 常体NでのNOシフトに向かう際のスピーチレベル



《韓国語》

図5 Downシフトに向かう際のスピーチレベル

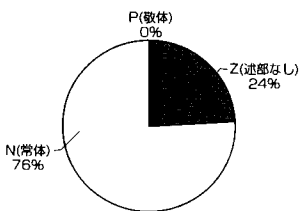
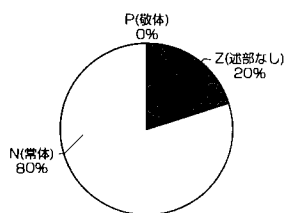


図6 常体NでのNOシフトに向かう際のスピーチレベル



日本語において、述部のない発話へのシフトが大きく目立つことに注目したい。

DownシフトとNNシフトへ向かうスピーチレベルは、日本語では常体Nと同程度に述部のない発話Zが高い割合を示している。しかし、韓国語においてはほとんど常体へ移行している。

日本語において、常体の機能を果たしている述部のない発話が、韓国語の2倍以上を占めているものと考えられる。このような結果は、今までの敬語研究において一度も言及されたことのない事実である。

それでは、DownシフトとNNシフトの際には、どのような述部のない発話が常体としての機能を果たしているのか、日韓両言語の例を提示する：

《日本語》

【例10】 女性ベースと同等男性の会話

発話 文No.	発話 終了	話 者	発 話 内 容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
41	*	日男同	今、日本語学科で？	N	Z	N	D
42	*	日ベース	日本語学科です。	N	P	P	U
43	*	日ベース	どこ、何科で？	N	Z	N	D
44	*	日男同	僕、朝鮮語で。	N	Z	N	NN
45	*	日男同	先生、だれ？	N	Z	N	NN

【例11】 女性ベースと目下女性の会話

発話 文No.	発話 終了	話 者	発 話 内 容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
71	*	日女下	あらあら。	N	Z	N	NN
72	*	日ベース	そうよ。	N	N	N	NN
73	*	日女下	まだまだ。	N	Z	N	NN
74	*	日ベース	まだまだ。＜笑う＞	N	Z	N	NN
75	*	日女下	え、じゃ、これぐらいの年の時はもう専攻も。	N	Z	N	NN
76	*	日ベース	日本語。	N	Z	N	NN

《韓国語》

【例12】 女性ベースと目上男性の会話

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
67	*	韓男上	아는 형이 동업식으로 일하다가 들 어와가지구. (知り合いの先輩が一 緒に働いてて入ってきたから.)	N	N	N	NN
68	*	韓男上	내가 무슨 얘기 하려고 그랬지. (私が何を話そうとしてたんだっけ.)	N	N	N	NN
69	*	韓ベース	오게 된 동기. (来ることになった 動機.)	N	Z	N	NN
70		韓男上	아, 그래서 공부를 했는데 아무래도 많이 배워야 될 것 같더라고요. (あ, それで勉強を始めたけど, どう してもたくさん習わなければいけな さそうな気がしてですね.)	N	P	P	UP

【例13】 女性ベースと同等男性の会話

発話 文No.	発話 終了	話者	発話内容	非文末 待遇	文末 待遇	機能 待遇	シフト
55	*	韓ベース	근데 거의 안 하구 둘러치고 내려가 지 않아요? (でもほとんどさぼっ て, 行くんじゃないですか?)	N	P	P	PN
56	*	韓ベース	술 한잔 하구서 수업 들어가구. (一杯やってから授業に行ったり.)	N	N	N	D
57	*	韓男同	오늘도. <웃음> (今日も. <笑い>)	N	Z	N	NN
58		韓ベース	그러셨죠? (そうなさたんでしょう?)	S	P	P	U

DownシフトとNNシフトに現われる述部のない発話は、UpシフトとPNシフトに現われる述部のない発話と異なる機能を表している。上記の例でも見られるように、述部のない発話は、常体や敬体のように、待遇のレベルが明確ではないし、完全な常体での発話でもないことから、初対面の相

手に対し、失礼ではない。

しかし、敬体を省略することで、距離感が縮められ、親密感が感じられる。このような述部のない発話は、日韓両言語共にpositive politenessストラテジーとしての重要な機能を果たしていると言える。

述部のない発話の日韓の決定的な違いは、日本語の述部のない発話の使用率が高く、例10, 11で見られるように、述部のない発話がずっと続いて現われ、会話を構成していることである。これに対し、韓国語では述部のない発話の使用率は低く、例12, 13でも見られるように述部のない発話で続く会話はほとんどない。日本語での述部のない発話の多用は、初対面である相手と上下関係を作ることを避け、もっと親しげに振舞うことが可能になるためではないだろうか。韓国語では、スピーチレベルシフトが年齢に従っているという上記の結果から、敬体もしくは常体を明示しない述部のない発話は、聞き手と話し手の社会的位置が明示できないため、その使用が避けられているのではないだろうか。

日本語における述部のない発話は、円滑にコミュニケーションを行うために、韓国語より量的にも質的にも重要な談話ストラテジーとしての効果を生み出していると言えるであろう。

5. ま と め

本稿で得られた重要な点を確認しておきたい。

1. 年齢差のある会話において、日本語では初対面という社会的条件が重視され、韓国語では年齢差が重視される傾向がある。年齢差のない同等関係の会話において、日本語では、年齢が優先され、親しげな会話であるのに対し、韓国語では初対面という条件が優先され、ある程度の丁寧さを維持しようとする傾向が見られた。
2. Upシフトは、両言語共に、四つのシフトの中で最も年齢差を反映している。このうち、日本語は会話の話者と相手が互いに丁寧さを表している傾向があるため、年齢さの反映は緩やかである。韓国語では、Downシフトと共に、年齢差が強く反映しており、目上話者のDownシ

フトと目下話者のUpシフトが目立つ。

3. PNシフト(敬体PでのNOシフト)とNNシフト(常体NでのNOシフト)において、日本語では現れる割合の高低の幅が広い。また、使用頻度の低い相手には低く、高い相手には高い割合を示している。相手のスピーチレベルに合わせ、相手との心的距離の調節を重視しようとする傾向が濃い。韓国語では、全ての会話において、PNシフト(敬体PでのNOシフト)は30%以上の割合を維持しており、NNシフトは、20%以下の低い割合を示している。初対面の相手に対する、ある程度のフォーマルさや丁寧さを維持しようとしていることがわかる。

これらは、上記の2.1で言及したように、ある特定の話者のシフトではなく、相手とのやりとりの変化のありようを見る、第2の方法を選択したために得られた結果であると言える。

以上の結果のうち、とりわけ注目すべき点が二つある。

一つ目は、日本語と韓国語のスピーチレベルシフトにおいて最も大きな差を見せている、述部のない発話の働きである。日本語においてDownシフトやNNシフトに現れた述部のない発話Zは、韓国語に比べ、二倍以上の割合で出現している。また、現れる様相も韓国語と異なっている。すなわち、韓国語では述部のない発話が一度現れても、次はすぐ敬体か常体へシフトされるが、日本語では述部のない発話が続くことが多く、述部のない発話のみで会話が成立するという非常に面白い現象が見られる。日本語における述部のない発話のpositive politenessストラテジーとしての機能も、韓国語より大きい。

DownシフトやNNシフトに表れている述部のない発話Zは、敬体や常体のスピーチレベルの省略により、年齢差による上下関係を作ることを避けながらも、心的距離を縮める機能をする。

二つ目は、韓国語のhapnita体へのUpシフトである。現われている発話文の数は少ないものの、hapnita体が持っている改まり度と格式性を逆利用し、談話の中で皮肉や強調、冗談で笑いを同伴するpositive politenessのストラテジーとしての機能も果たしている。

こうした日本語での述部のない発話のpositive politeness戦略と、韓国語での敬体、hapnita体へのUpシフトのpositive politeness戦略は、初対面の会話において、日本語と韓国語の会話スタイルの異なる面を鮮明に映し出しているのである。

また、B&L(1987)のpoliteness理論の観点からも、宇佐美(2001)による日本語の結果と同様、韓国語においても、敬体から常体へのDownシフトと常体から敬体へのUpシフト、また述部のない発話への移行などが、politeness戦略として機能していることも確認できた。

既存の待遇法研究ではスピーチレベルを何段階に分けるかはどうあれ、です・ます体、hapnita体、hayyo体等々に見える待遇を表わす用言語尾が待遇を支えるものとして暗黙裡に考えられてきた。しかしながら、本稿で初めて明らかにしたごとく、談話において待遇を支えるのは、待遇法語尾ばかりではない。述部のない発話、つまり待遇法語尾を持たぬ発話にあって、本稿で非文末待遇と呼ぶデバイスによって、聞き手に対する待遇は見事に支えられているのである。待遇法研究はこうして文末の述部の形式にのみ注目する段階から、非文末待遇のメカニズムへも着目する段階へと進むことになるであろう。

本稿で端緒を得たように、日本語と韓国語の敬語における対照研究は、一発話文を中心とした静的な研究から、談話における動的な研究へと進まなければならない。今後は、例えば本稿で見たように、スピーチレベルの動的なシフトを、談話の戦略として観察するなど、新しい段階の対照研究へ進むことが求められる。さらに、スピーチレベルシフトに限らず、談話の流れにおける豊富なダイナミズムのありようを照射する研究へ向かうべきであろう。

註

- (1) スピーチレベルを単なる「敬語」の観点からではなく、Brown&Levinson(1987)の定義するpolitenessの観点から談話戦略として捉える。また、待遇法が現れる文末だけではなく、一発話文全体に置ける待遇レベルを考察するため、ここでは敬語レベル(Ikuta(1983)、生田・井出(1983)、足立

(1995)や待遇レベル(三牧(1993))ではなく、スピーチレベル(宇佐美(1995))という用語を用いる。

- (2) 宇佐美(1995)は、B&Lのpoliteness理論におけるlinguistic politenessを規定する三要素「力関係(power)」、「社会的距離(social distance)」、「負担の度合い(ranking of imposition)」を借りて、実験の枠組みを形作っている。まず、初対面の相手と会話を行なうことで「社会的距離」の一定条件を保ち、同じ場面で同じ話題から始めることによって、「負担の度合い」の一定条件を保つ。

さらに、ベースとなる一人の女性被験者に対し、同性と異性、それぞれ「目上」、「同等」、「目下」と対話者を振り分け、対話者の年齢、社会的地位、性別差の「力関係」に変化を与えることにより、言語使用の変化を見ている。

- (3) 被験者は、日本語母語話者7名(ベース女性1名、対話者女性3名、対話者男性3名)、韓国語母語話者7名(ベース女性1名、対話者女性3名、対話者男性3名)である。質問紙で尋ね、日韓それぞれ、東京共通語とソウル方言を日常生活言語として使用している話者に限った。

〈日本人被験者のデータと会話の組み合わせ〉

ベース被験者	会話番号	対話者(女性)	会話番号	対話者(男性)
日ベース 24歳 大学院生	1	日女上：30歳，大学院生	4	日男上：31歳，大学院生
	2	日女同：24歳，大学院生	5	日男同：24歳，大学院生
	3	日女下：18歳，大学生	6	日男下：18歳，大学生

〈韓国人被験者のデータと会話の組み合わせ〉

ベース被験者	会話番号	対話者(女性)	会話番号	対話者(男性)
韓ベース 24歳 大学教務補佐員	1	韓女上：30歳，図書館職員	4	韓男上：29歳，大学生
	2	韓女同：24歳，大学院生	5	韓男同：24歳，大学生
	3	韓女下：19歳，大学生	6	韓男下：19歳，大学生

- (4) 会話外の重要な二次的データとして、宇佐美(1995)にならい、会話開始前、年齢、性別、出身地などを尋ねる質問紙調査と、会話終了後、相手や会話に対する感想を聞くフォローアップアンケートを質問紙調査と口頭で行なった。フォローアップアンケートでは、5段階(1.とても自然だった 2.やや自然だった 3.わからない 4.やや不自然だった 5.とても不自然だった)に分けて会話の自然さを尋ねた。その結果、1.2以外の3.4.5段階の、会話が不自然だったと答えた被験者の会話は、データとして認めず、同じ条件の下に、他の被験者との会話を行なった。実験場所は、日本語は東京の、韓国語はソウルの大学の講義室である。

- (5) 会話文字化の時間について、メイナード(1993)は、「会話を交わす当事者

は、時間が経つにつれて録画、録音されていることに慣れ、だんだん自然の形になる」と判断し、開始から2分間を除外し、それに続く3分間を分析の対象にしている。しかしながら、初対面の会話においては、会話の特徴がもつとも現れる最初の段階が重要であると思われるので、本稿では最初の5分間を文字化し、分析した。

- (6) 杉戸(1987)によると、「発話」という「単位」は、「一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続(ただし、笑い声や短い相づちも含む)で、他の参加者の音声言語連続とかポーズ(空白時間)によって区切られるごとに1単位と数えようとする単位」であり、文法でいう文よりも短い文節や句や語ということもあれば、ふたつ以上の文の連続であることもあるという。本研究では、この定義に従いつつ、話者のイントネーション、ポーズ、沈黙なども考慮に入れ、一発話文を同定した。
- (7) コーディングの原則に基づいた会話の分析、発話の分類の信頼性を確認するために、第二認定者(second coder)を立てる。第二認定者は韓国語、日本語に対して、それぞれ東京方言を使用する日本語母語話者、ソウル方言を使用する韓国語母語話者に制限する。文字化した会話の資料の10%を、筆者と第二認定者がそれぞれ個別にコーディングを行ない、その判断の一致度をCohen's kappa (Bakeman & Gottman, 1986)を用いて確認する。本研究のコーディングに対する筆者と第二認定者の一致率の結果を以下に示す。
 <日本語と韓国語に対するコーディングの一致率(数字:kappa値)>

	非文末待遇	文末待遇	機能待遇
日本語	0.94	0.94	0.85
韓国語	0.93	0.94	0.85

上記の表のように筆者と第二認定者の0.8を超える一致率から、今回の会話文字化のコーディングは信頼できるデータであると言える。

- (8) 宇佐美(1998, 2001)では、これを「文末形式」と呼んでいる。
- (9) 本研究のZに相当する発話文を、宇佐美(2001)ではNM(no-politeness marker)と記号化し、「丁寧度を示すマーカーのない発話文、中途終了型発話文」と定義している。しかし、そこでは、「丁寧度を示すマーカー」の定義が示されておらず、不明瞭である。また、「中途終了型発話文」は、「最後まで言い切っていない発話」であると宇佐美(1995:35)に定義されている。この定義と、そこに示された「行かないし……」のような例から考えると、中途終了型発話を決定する基準は音声ということになる。「丁寧度を示すマーカーのない発話文」は言語形式にその判断基準が置かれているのに対し、「中途終了型発話」は音声にその判断基準があり、NMの定義が言語形式によるものなのか、音韻によるものなのか、次元の異なる判断基準を一緒に立てているよう

に思われる。また、宇佐美(1995:35)では、「英語を教えるわけにもいかなしい...」の例を「中途終了型発話」であると言いつつ、「[「いかなしい」を「いきませんし」と丁寧体にすることができるにもかかわらず、あえて常体が使われていると判断して、一レベル(常体を含む発話)に分類した。](カッコ内は引用者)と述べている。これは宇佐美(1995)も「中途終了型発話」において、述部があれば、現れた述部によってスピーチレベルを決定しており、同稿の言う「中途終了型発話」をNMではなく「一レベル」、即ち「常体」と見ているわけである。こうした記述は宇佐美(2001)のNMの定義とは矛盾していることになろう。さらに、述部がある発話の場合、いいよどみがあるのか、話者の意志による発話終了なのか、話者でない研究者には区別し難く、同じ発話文が研究者によってNにもZにも記号化されうる危険があるであろう。そこで本稿では述部の有無をP、NとZの判断基準にするわけである。「中途終了型発話」に関する詳細は本稿の3.3.3を参照。

- (10) 宇佐美(1998,2001)では、本稿で言う非文末待遇に、文末待遇まで含めて「文中形式」と呼んでおり、その項目はS、P、N、Zに分類されている。本稿は文末とそれ以外の非文末を厳密に区別する立場である。
- (11) 宇佐美(1998,2001)では、尊敬語と謙譲語の使用をSのsuper-polite formsにコーディングしているが、これは聞き手に対する尊敬語、謙譲語だけに対するコーディングである。本研究では第三者に対する尊敬語、謙譲語に対してS3という新しいコーディング項目を設定する。
- (12) 宇佐美(1998,2001)では、これを「機能形式」と呼んでいるが、「機能形式」という名称は形容矛盾であろう。機能についての待遇を見るのであるから、本稿では「機能待遇」と呼ぶ。
- (13) 宇佐美(1998,2001)では、スピーチレベルシフトを、[DI: Down-shift from Interlocutor, DS: Down-shift from Self, UI: Up-shift from Interlocutor, US: Up-shift from Self, NI: No-shift from Interlocutor, NS: No-shift from Self]の六つの種類に分類している。
- (14) 韓国語においては、1940年代まで用いられたスピーチレベルの一部が消失していることやその使い方の変化が남기심(1970), 김영근(1974), 서정수(1984)などにより指摘されていることから、本稿では、1950年代以後の現代ソウル方言に現れるスピーチレベルを扱う。

韓国語におけるスピーチレベルの区分を、伝統的な上下の等級を基にして文体(style of speech)の違いを区分したのがMartin(1964)である。そこでは大きくingroupとoutgroupに分けている。さらに前者をplain(-ta), intimate(-na), familiar(-e, -ci)に、後者をpolite(-eyo, -ciyo), authoritative(- (s) o), deferential(- (su) pnita)に分け、文体的変異(stylistic variation)であると記述している。서정수(1972)は、Respect, Formalの二つの特徴を立てて、四

つの待遇レベルを認めている。+ Respect・+ Formal (格式的尊待:pnita, op/naita), + Respect・- Formal (非格式尊待:e/ayo.o/so), - Respect・- Formal (非格式非尊待:c/a.ney), - Respect・+ Formal (格式的非尊待:nun/ta)に分類し、格式体と非格式体を区分した。梅田(1977)は、上下関係の違いを基本とする四つの待遇レベルを立て、上称(supnita)、中称(o/so, wu/swu)、等称(ney)、下称(ta)と呼んでいる。さらに、略待丁寧形(eyo)と略待普通形(e)を認めている。노마[野間](1996a)は、会話体における待遇レベルを、敬意体(上称形)と非敬意体(下称形)に大きく分け、敬意体(hayyo体:一格式.hapnita体:+格式)では格式性の有無を認めているが、非敬意体(hay体.hanta体)では格式性を認めていない。

スピーチレベルを格式体と非格式体に分ける研究方法は서정수(1984), 남기삼・고영근(1985), 노마[野間](1996a)などにより盛んに行われているが、一方で서정수(1984)の「hao体とhakey体の使用が目立って少なくなり、hayyo体とhay体の使用は圧倒的に増えている」という報告もなされている。結局のところ, 노마[野間](1996a)によるスピーチレベルの分類が現代ソウル方言の会話に最もふさわしいものであると思われる。なお、韓国語のローマ字表記はYale方式に従う。

- (15) 노마[野間](1996a)参照。
- (16) 성기철(1983)は、「시」は主体尊待であり、待遇の区分に問題視される“해요体”は聞き手尊体である。主体と尊待遇が同一の場合, “세요”(“시”と“해요”の複合形)は, “해요体”より尊待される」(引用者訳)と述べている。
- (17) 南(1974)による問投詞, 応答詞の類参照。
- (18) < >:相手の発話と重複している発話の範囲 その他, 会話の文字化においては, 宇佐美(1997)の「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」参照。
- (19) 노마[野間](1996a)の「会話体での待遇法の体系」に従った。
- (20) 各グラフの中で割合を示す数は, 各話者が行なった総発話数に対して, PN(敬体Pの発話からシフトが行われていない場合), D(直前の発話よりスピーチレベルが下がった場合), U(直前の発話よりスピーチレベルが上がった場合), NN(常体Nの発話からシフトが行われていない場合)のそれぞれの要素が表れた発話数を表したものである。各図ごとに, aはベースが相手に対して行ったスピーチレベルの頻度で, bは相手がベースに対して行ったシフトの頻度である。bの横軸は相手に対してベースが目上になり, 相手はベースに対しては目下になる。ベースに対し相手を目上, 同等, 目下に対応させて, 相手の立場からもベースが目上, 同等, 目下に対応するように構成されている。

【謝辞】 本稿の執筆にあたって、東京外国語大学の野間秀樹、宇佐美まゆみ、伊藤英人の諸先生、また同志社大学の油谷幸利先生にご指導いただいたきました。この場を借りて感謝申し上げます。

＜参考文献＞

- 足立さゆり(1995)「会話の流れにおける尊敬語の視点とシフト」『日本語の研究と教育 窪田富男教授退官記念論文集』東京：専門教育出版
- 生田少子・井出祥子(1983)「社会言語学における談話研究」『言語』vol.12 No.12 東京：大修館書店
- 生田少子(1983)「Discourse Strategyとしての敬語の機能」『機能による言葉の分析』東京：文化評論出版
- 井上史雄(1999)『敬語はこわくない』東京：講談社
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学究』東京：昭和女子大学 近代文化研究所
- 宇佐美まゆみ(1997)「基本的な文字化の原則の開発について」『日本人の談話行動のスク립タ・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』東京：文部省科学研究費基盤研究 研究成果報告書
- 宇佐美まゆみ(1998)「ディスコース・ポライトネス・ストラテジーとしてのスピーチレベル・シフト」東京：日本語教育学会秋春大会予稿集
- 宇佐美まゆみ(1999)「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」『日本語学』第18巻 10号 東京：明治書院
- 宇佐美まゆみ(2001)「[ディスコース・ポライトネス]という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『語学研究所論集』第6号 東京：東京外国語大学語学研究所
- 梅田博之(1977)「朝鮮語における敬語」『岩波講座日本語4 敬語』東京：岩波書店
- 大石初太郎(1974)「敬語の本質と現代敬語の展望」『敬語の体系』林四郎・南不二男編集 敬語講座第1巻 東京：明治書院
- 大石初太郎(1982)「現代敬語の特質、その将来」『敬語史』森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編集 講座日本語学9 東京：明治書院
- 荻野綱男(1989)「対照社会言語学と日本語教育—日韓の敬語用法の対照研究を例にして—」『日本語教育』69号 東京：日本語教育学会
- 荻野綱男(1995)「21世紀の敬語表現はどうか」『国文学』第40巻 第14号 東京：學燈社
- 菊地康人(1988a)『日本語百科大辞典』金田一春彦・森大・柴田武編集 東京：大修館書店
- 菊地康人(1988b)『敬語』東京：角川書店
- 久野璋(1983)『談話の文法』東京：大修館書店
- 熊谷智子(1997)「はたらきかけのやりとりとしての会話」『対話と知』茂呂雄二編集 東京：新曜社
- 窪田富男(1990)『敬語教育の基本問題(上)』東京：国立国語研究所
- スタッフズ、マイケル(1989)『談話分析』南出康世、内田聖二共訳 東京：研究社
- 辻村敏樹(1969)『敬語の史的研究』東京：東京堂出版

- 中田智子(1990) 「発話の特徴記述について—単位としてのmoveと分析の視点—」 『日本語学』 vol.9 No.11 東京:明治書院
- 西野容子(1993) 「会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」 『日本語学』 vol.12 No.5 東京:明治書院
- 杉戸清樹(1983) 「待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点—」 『日本語学』 vol.2 No.7 東京:明治書院
- 杉戸清樹(1987) 「発話のうけつぎ」 『談話行動の諸相 座談資料の分析』 国立国語研究所報告92 東京:三省堂
- 水谷信子(1988) 「あいづち論」 『日本語学』 vol.7 No.12 東京:明治書院
- 水谷信子(1993) 「『共話』から『対話』へ」 『日本語学』 vol.12 No.10 東京:明治書院
- 南不二男・森大・林四郎・芳賀綾(1974) 「敬語の体系」 『敬語の体系』 林四郎・南不二男編集 敬語講座第1巻 東京:明治書院
- 南不二男(1972) 「日常会話の構造」 『言語』 vol.1 No.5 東京:大修館書店
- 南不二男(1974) 『現代日本語の構造』 東京:大修館書店
- 南不二男(1987) 『敬語』 東京:岩波書店
- 三牧陽子(1993) 「待遇レベルシフトの談話分析」 『AKP紀要』 第3号 京都:同志社大学
- 三牧陽子(2001) 『対話における待遇レベル管理の実証的研究』 平成9年度~平成12年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書 大阪:大阪大学留学生センター
- メイナード・K・泉子(1993) 『会話分析』 東京:くろしお出版
- 고영근[高永根](1974) '현대국어의 준비법에 대한 연구' 『語学研究』 第10卷 第2輯 서울: 서울대학교 어학연구소
- 남기심 고영근[南基心·高永根](1985:1998) "표준국어문법론 개정판" 서울: 탑출판사
- 노마히데키[野間秀樹](1996a) '현대 한국어의 대우법 체계 "말" 제21집 서울: 연세대학교 연세어학원 한국어학당
- 노마히데키[野間秀樹](1996b) '한국어 문장의 계층구조' 『언어학』 제19호 서울: 한국언어학회
- 노석기(1990) '우리말 담화의 결속 관계 연구' 『한글』 제208호 서울: 한글학회
- 서정수[徐正洙](1972) '현대 국어의 대우법 연구' 『어학연구』 8-2 서울: 서울대학교 어학연구소
- 서정수[徐正洙](1984:1997) '존대법의 연구—현행 대우법의 체계와 문제점' 서울: 한신문화사
- 서정수[徐正洙](1996) "국어문법" 서울: 한양대학교출판부
- 성기철[成嗜徹](1970) '국어 대우법 연구' 『충북대 논문집』 청주: 충북대학교
- 성기철[成嗜徹](1983) 『國語對遇法研究』 『現代國語文法』 대구: 啓明大學校出版部
- 성기철[成嗜徹](1984) '현대 국어 주체 대우 연구' 『한글』 제184호 서울: 한글학회
- 성기철[成嗜徹](1985) 『國語의 話階와 格式性』 『언어』 제10권 제1호 서울: 한국언어학회
- 이정복[李正福](1996) '국어 경어법의 말 단계 변동 현상' 『사회언어학』 제4권 제1호 서울: 한국언어학회

- Bakeman, R. & Gottman, J. (1986) *Observing Interaction : An Introduction to Sequential Analysis*
Cambridge : Cambridge University Press
- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness : Some Universals in Language Usage*. NY: Cambridge
University Press
- Ide, Sachiko. (1982) Japanese Sociolinguistics : Politeness and Women's Language. *Lingua* 57
357-385
- Ide, Sachiko. (1989) Formal Forms and Discernment : Two Neglected Aspects of Universals of
Linguistic Politeness. *Multilingua* 8-2/3 223-248
- Ikuta, Syoko. (1983) Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse.
Language Science Vol 5 No.1
- Martin, S.E. (1964) Speech Levels in Japanese and Korean. *Language in Culture and Society*
Hymes.D. (ed.) , NY: Harper& Row
- Matsumoto, Yoshiko. (1989) Politeness and Conversational Universals – Observations from
Japanese. *Multilingua* 8-2/3 207-221
- Roger, Bakeman and John M, Gottman. (1986) *Observing Interaction : An Introduction to Sequential
Analysis* NY: Cambridge University Press
- Sacks, H., Schegloff, E.A. and Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of
turn-taking in conversation. *Language* 50 696-735
- Schiffirin, Deborah. (1987) *Discourse Markers*. NY: Cambridge University Press
- Searl, John R. (1969) *Speech Acts : An Essay in the Philosophy of Language* NY: Cambridge
University Press (坂本・土屋訳 (1986) 『言語行為』 勁草書房)